

今週のメニュー

トピックス

塩ビサイディングによるコンクリートの硫化水素害からの保護効果検証試験始まる
樹脂サイディング普及促進委員会

随想

インテリア紀行 (No.2)

- 現存する世界最古のパジリク絨毯 -

インテリア文化研究所 代表 本田 榮二

編集後記

トピックス

塩ビサイディングによるコンクリートの硫化水素害からの保護効果検証試験始まる
樹脂サイディング普及促進委員会

日本は四季があり自然に恵まれた国である一方、凍害地域（寒冷地）や塩害地域、そして硫化水素害地域（火山地帯＝温泉地）や、地震の多い地域等固有の自然環境に晒された地域も多く、住宅にとってはかなり厳しい自然環境への対応が求められています。これら地域では建物の構造もさることながら、建物に使用する材料についても耐久性や安全性が求められることとなります。

塩ビサイディングの最大の特長は「丈夫で長持ち」「軽量」「メンテナンスが楽」であり、この特長は、あらゆる地域でご利用頂く際のメリットとなりますが、上述の固有の自然環境においてもその対応が求められており、樹脂サイディング普及促進委員会では、その裏づけとなるデータ取得等、長年に亘り大学の先生のお力をお借りし進めているところです。

この度、同委員会では、一昨年開始した塩ビサイディングによるコンクリートの塩害・中性化抑制効果検証試験に引続き、九州大学の小山智幸准教授、琉球大学の山田義智教授、日本大学の湯浅昇准教授との共同により塩ビサイディングによるコンクリートの硫化水素害からの保護効果検証試験に着手しました。

試験は、九州大学の霧島（鹿児島県）暴露場において12月5日より開始、コンクリート打放し、コンクリート+吹付け塗装、（ウレタン、フッ素）コンクリート+塩ビサイディング施工の3種類の試験体により行われています。今後、定期的に試験体を回収し夫々のコンクリート試験体への硫化水素浸透度を観察して行くとともに、硫化水素による塩ビサイディング本体、施工用ビスなどの部材や塗装への影響を観察して行く予定にしています。



試験体

自然が相手のため、どのような結果となるかは現時点で明言することはできませんが、耐薬品性に優れた塩ビサイディングが躯体となるコンクリート試験体を硫化水素等から保護してくれることを期待しています。

塩害からの保護効果検証同様、試験は長期に亘るため最終的な結論ができるのは数年先のこととなりますが、定期的に測定、観察した結果はできる限り建築学会等の場で報告をして行く予定です。



暴露場付近の様子

塩ビサイディング本体そのものが凍害、塩害、薬品（酸やアルカリ）に対して非常に強いことはこれまでの試験結果から実証されていますが、今回の硫化水素害や先の塩害の検証試験はサイディング材本来の役目である建物躯体の保護という観点からの検証であり、保護効果を定量的に把握することができれば、国の推し進める建物の長寿命化の施策にも貢献できると考えています。（了）

随想

インテリア紀行（No.2）

- 現存する世界最古のパジリク絨毯 -

インテリア文化研究所 代表 本田 榮二

まだ最終結果が発表されていないが、昨年のタフテッドカーペット国内生産量は約 6000 万㎡と推定される。これに不織布のニードルパンチカーペットや機械織のウルトン、アキスミンターなどを加えるとカーペット総計では一億㎡前後になる。これを卸売ベースで金額換算すると約 1000 億円、壁紙と同規模である。但し壁紙の場合は輸入品が極僅かであるのに対して、カーペットはペルシャ絨毯や天津緞通などの高級品、或いはホームセンターなどで見かける中国製のリーズナブル品などを含めると輸入品だけで国内生産量を上回る 1100 億円前後に達する。

このように書くと、「なーんだ今回はカーペットか、塩ビとは関係ない」と思われるかもしれないが、事実は小説よりも奇なりで、大いに関係が深い。深い理由は伸長著しいタイルカーペットの存在である。おそらくタイルカーペットは、昨年も 3000 万㎡前後、生産されたのではないだろうか。

さてタイルカーペットが我国に初めて登場したのは、1970（昭和 45）年の大阪万博である。オランダ館のパビリオンに同国ヒューガ社のタイルカーペットが全面的に採用された。では万博を契機に大きく伸びたかということ、関係者の期待に反して伸びなかった。理由はバックがアスファルトを主体としたビチューメンだったからである。その意味では現在の興隆をもたらした最大の要因は、東リ(株)が 1982（昭和 57）年に発売した塩ビバックのタイルカーペット『GA100』の存在と断定しても間違いではない。

従来のビチューメンバックと比べて『GA100』の品質や施工性は格段に優れていた。またビチューメンバックのように施工時、壁などを汚すこともない。市場が拡大したのは当然だろう。実は本人自身のことなので言い難いが、この『GA100』の開発担当者は、当時、カーペット事業部に籍を置いていた不肖私である。

閑話休題。このように裾野の広いカーペットだが、ルーツを訪ねると1枚の手織絨毯に辿り着く。それがロシアのエルミタージュ美術館が保有するパジリク絨毯である。1947年、ソ連の考古学者ルデンコを隊長とする発掘チームはアルタイ山脈の標高1500m地点にあるパジリク渓谷で遊牧民スキタイの古墳を発見する。発掘したところ多数の貴重な遺物が見つかり、中でも縦200×巾183cmのウール絨毯は色々な意味で注目の的であった。

この一帯は永久凍土、玄室内も天然の冷凍庫状態であったため絨毯も奇跡的に原形を留めたようだ。鑑定した結果、紀元前5世紀頃に作られたのが判明、現存する世界最古の敷物という事が確認される。前5世紀というと日本は縄文から弥生時代への移行期である。この時代に絨毯が作られていたとは驚きである。

さてトルコ結びのピイルは結び目が約125万個という驚くべき密度である。おまけに天然染料で染められた繊維は2000年以上の歳月を経ているにも拘らず殆ど退色していない。奇跡と呼んでも過言ではないだろう。

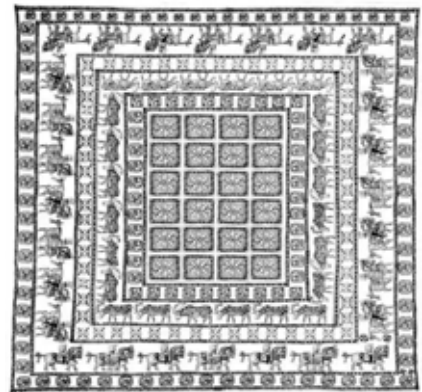
デザインは中心に古代アッシリア王国の四葉飾りの花模様が格子状に24個並んでいる。それを囲むように5列のボーダー文様を配し、一番内側のボーダーには空想上の動物グリフォン(有翼怪獣)が42頭並んでいる。次の2列目は立派な角を持ったトナカイ24匹の行列。三列目は小型の四葉飾りが62個並び、四列目はペルシャの古代王朝アケメネス帝国の騎士とおぼしき28人の騎馬行進が描かれている。注目は全員が馬の鞍替りに絨毯を使用している事である。おそらくパジリク絨毯も馬の背中に敷くために織られたものだろう。そして一番外側の5列目には雄鹿81頭が整然と配列されている。とにかく意匠的にも素晴らしく生活道具には違いないが芸術の域に達している。

さて生産地の推定だが、パジリク絨毯をスキタイ人が製作したと考えるには無理がある。同じ古墳から「高輪の車」が出土して、古代の歴史家ヘロドトスによる「家を運んでは移動してゆく騎馬の弓使いで・・・住む家は獣に曳かせる車である」(岩波文庫『歴史』)という記述を証明している。この車を使えば大型織機を運ぶことも可能だ。だが玄関マットのような小型絨毯ならいざ知らずパジリク絨毯の大きさでは移動と戦乱に明け暮れたスキタイ人が織る時間的余裕はなさそうだ。発掘者のルデンコも著書『スキタイ時代の山地アルタイ人の文化』の中で絨毯のデザインを根拠にアケメネス朝ペルシャで作られたと推定している。

これ以外に筆者がペルシャ生産説を支持する根拠は、大英博物館が保管しているアッシリア帝国アシュルバニパル時代(紀元前668~627)のクウンジーク宮殿に敷かれていた



パジリク絨毯



パジリク絨毯(スケッチ)



一緒に発掘された女神と馬上の騎士を描いた大きなフェルト、玄室の周囲を囲っていた

絨毯の意匠を彫刻したと思われるレリーフの床敷石である。紙面の都合で写真を掲載できないが、中央の四葉飾りと全体の構成がパジリク絨毯と酷似している。おそらく当時の西アジアでは絨毯の意匠としてボーダー文様が一般的であったようだ。

しかし6世紀末にマホメットが興したイスラム教の勢力拡大に伴い紋様も徐々に偶像禁止の観点から相華紋や樹木紋、幾何柄などが増えていく。このようにインテリア文化は気候風土だけでなく宗教によっても影響される。

さてスキタイやサルマタイなどの遊牧騎馬民族が活躍した紀元前の時代、中央アジアには「絹の道」に先立って一望千里の「草原の道」が存在していた。彼等はその7000キロにも及ぶ道を自由に往来して交易を行っていた訳である。なんとスケールの大きな話ではないか。

(つづく)

前回：[インテリア紀行 \(No.1\)](#)

[- 現存する世界最古の壁紙ケンブリッジ・フラグメント -](#)

編集後記

我が家の断熱改修と増築工事が始まりました。

寒くないオール電化の家を目指しています。

まず既築部は寒さが厳しい浴室出窓に樹脂サッシの内窓をつけました。リビングなどでの内窓施工はよくあると思いますが、浴室での実績はあまりないようです。今までの窓は単板のアルミサッシでびっしり結露し寒さが浴室全体を冷やしていました。今回付けた内窓の効果は抜群。まったく浴室が寒くなくなりました。

これから増築工事、床下と屋根に断熱材を入れ、最後にエコキュート、IHコンロの工事です。(リマル)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp